

神のご計画の不思議さ

加藤 享

[聖書] 箴言16章1～9節

人間は心構えをする。主が舌に答えるべきことを与えてくださる。人間の道は自分の目に清く見えるが、主はその精神を調べられる。あなたの業を主にゆだねれば、計らうことは固く立つ。主は御旨にそってすべての事をされる。逆らう者をも災いの日のために造られる。すべて高慢な心を主はいとわれる。子孫は罪なしとされることはない。慈しみとまことは罪を贖う。主を畏れれば悪を避けることができる。主に喜ばれる道を歩む人を、主は敵と和解させてくださる。稼ぎが多くても正義に反するよりは、僅かなもので恵みの業をする方が幸い。人間の心は自分の道を計画する。主が一步一步を備えてくださる。

[序] 人生のつぼに差し込む格言

今日は、旧約聖書の中の知恵文書の一つ、**箴言**の一か所を学びます。ヘブル語「マーシャール」は「比較」という意味の言葉です。一つの事柄を他の事柄と比較対照させて、理解し記憶しやすいようにした格言集です。或る本にその例として「豚が鼻に金の輪を飾っている。美しい女に知性が欠けている」(11:22)を引用していました。賢者とはいっても女性を見下す**男性優位の社会の産物**ですね。私だったら「憎しみはいさかいを引き起こす。愛はすべての罪を覆う」(10:12)などを引用するでしょう。日本語の「箴言」は漢訳からきました。体のつぼに針(箴)をさして病気を治すように、「**人生のつぼに差し込む格言**」といった意味です。いい言葉ですね。

ソロモン王の格言集だとしていますが、彼が知恵に優れていたからでしょう。彼は若くして王位に就いた時、神さまに何はさておき、民を正しく裁き、善と悪を判断する**聞き分ける心**を願い求めました。その結果、「イスラエルの人々は皆、王を畏れ敬うようになった。**神の知恵**が王のうちにあって、正しい裁きを行うのを見たからである」(列王記上 3:28)と聖書に記されています。しかし今日の形にまとめられたのは、紀元前 300～250 年頃、賢者といわれた人達が活躍した時代に編集されたものだと言われています。「**主を畏れることは知恵の初め**」(1:7) 本当の知恵とは主なる神さまを畏れ敬うことから始まる——これがこの書の**基本姿勢**です。

[1] 宗教者の確信

さて16章1節「人間は心構えをする。主が舌に答えるべきことを与えてくださる」皆さんはこの言葉を、すっと理解出来ますか？ 新改訳「人は心に計画を持つ。主はその舌に答えを下さる」の方が、すんなり分かるのではないのでしょうか。新しい聖書翻訳をするに当って、立派な先生達がどうして、「心構えする」などという良く分からない言葉を採用したのでしょうか？ これが**人の知恵**のおかしさのよい例？ とつい思ってしまいます。

西南の神学部を定年退職された旧約の専門家**小林洋一教授**の「旧約聖書説教集」を読みました。永らく長住教会の協力牧師をされ、山下先生夫妻とも一緒に働かれました。冒頭の神学生を相手にされた説教「**宗教者の確信**」（箴言 26：1～12）の一部をご紹介します。

「宗教者に確信（信念）はつきものです。宗教者の一般的なイメージの一つに**確固不動の信念の人**というのがあります。時として、そのような確固不動の信念が**称賛の的**になったりもします。宗教者は、自分が確信することのみを、説得力をもって語ることができるとも言われたりします。宗教者が説教する場合には、『**と思います**』を連発せずに、確信をもって、『**です、ます**』と断言的に言い切るべきであるとの忠告がなされたりもします。

確信を持つことは、宗教者にとって良いことであり、また必要なことであります。しかしながら、宗教者の確信は、時とすると神と信仰の名において、容易に自己の確信、信念を**絶対化**し、他の確信、信念の可能性を**ないがしろにしてしまう危険**な側面も持っています。私たちが持つように期待されている『確信』とは、一体どのようなものであるべきなのでしょうか」

こうして小林先生は箴言 26 章を説いた後で、今日の箇所箴言 16 章 1 節・9 節を引用しておられます。「誰でも自分が現実問題に対して誤りのない絶対的な答えを持っていると確信する者は、自分の限界を超えて誉を求めることになります。そしてそれは思い上がり以外の何ものでもなく、自分を自分の目に賢い者とすることになります。**究極的な答え**（確かさ）を持っているのは、**主なる神のみ**であって、人ではありません。『心にはかることは人に属し、舌の答は主から出る』（1 節）『人は心に自分の道を考える、しかし、その歩みを導く者は主である』（9 節）（口語訳）

宗教者にとって確信は必要であり、また大切なことです。しかし宗教者は自己の確信が、絶えず絶対化、完結化に向かう傾向を持つことに目覚めている必要があります。その意味で、相対化の用意のある**開かれた確信**、揺らぐこと、疑うこと、ためらうこともある確信、そして何にもまして自分の限界をわきまえた**謙虚で確たる信**とでもいうべきものが、私たちに一番ふさわしいのではないのでしょうか。」

そうですね。「自分の舌に、神さまが答えをのせて、言わせてくださる」と言いますが、では「自分のこの言葉は、まさに**神さまからの答**なのだ」という根拠はどこにあるのでしょうか。「祈っていた時に示された」確かにそうしか言い様がありません。しかし神さまは**霊**によって語られると同時に、**御言葉**によっても語られるお方です。ですから私たちは御言葉、即ち**聖書**からも、祈りによって示された御心を探し求めます。その上で「私はこのように答えを与えられました」と信じて表明するのです。すると聞いた人も、**祈り**と共に**聖書をひも**といて、自分に対する神さまの語りかけを聞き取っていき、こうして神さまの答えが、他の人と共有されることになるのではないのでしょうか。

[2] 神さまの御業の不思議さ

次に4節に注目しましょう。新共同訳では「主は御旨にそってすべての事をされる。逆らう者をも災いの日のために造られる。」口語訳では「主はすべてのものを、おのおのその用のために造り、悪しき人をも 災いの日のために造られた」新改訳では「主はすべてのものを、ご自分の目的のために造り、悪者さえも わざわいの日のために造られた」

新共同訳によると、「神はご自分のお考えによって、すべての事をなさっておられる。神に逆らう者も、神に逆らうことによって、裁きの日の**神の裁きをあらわす役割を果たすのだ**」という意味ではないかと思えます。口語訳の「その用」新改訳の「ご自分の目的」の原語は「**答え**」です。ですから「神さまはすべてのものを、自分のお考えの**答え**としてお造りになった。従って神さまが悪い者を裁く日に、彼によってご自分の答えをはっきりと示される」という信仰だと、私は受け取ります。

何故、神さまはご自分に逆らう者、**悪しき人をお造りになった**のでしょうか。**悪人の存在**をどう受けとめればよいのでしょうか。主の弟子ユダ、ペトロ、パウロを思い浮かべてみましょう。**ユダ**は会計係を仰せつかりました。頭の良く切れる人だったのでしょう。どうして主イエスを**敵に売り渡した**のか。またそのような悪人を、主はどうして**弟子にされた**のでしょうか。

祭司長や長老たちは大祭司の屋敷に集まり、イエスを捕えて殺す相談をしました。一方主イエスは二日後の過越祭で逮捕され十字架に付けられると弟子たちに**最後の予告**をなさいます。そしてベタニアのシモン家で高価な香油を頭から注いだ女性を弟子たちが非難すると、「**私を葬る準備**をしてくれたのだ」と弁護されました。**それを見て**、ユダは祭司長たちの所へ行き、銀貨30枚でイエスを引き渡す約束をしたのです。主はすぐさまそれに気付かれました。そして最後の晩餐の席上で、「人の子は聖書に書いてあるとおりに去っていく。だが、**人の子を裏切るその者は不幸だ**。生まれなかった方が、その者のためによかった」と嘆いておられます。(マタイ26章)

ユダは主イエスに出会い、この方に従えば自分の人生が開けていくと思い、従い始めました。そして主のなさる数々の奇跡、教えに、この方こそ**待望のメシヤ**と期待するようになったのでしょう。ところが主は一向に、都に上ってメシヤの栄光を現わそうとはなさいません。それどころか受難の告知を繰り返します。彼は**混乱**してきました。そして祭司長達と主を**対決させる場面**を作り出して、主に**決起**して頂こうとしたのではないのでしょうか。

主イエスは最後の晩餐后、ゲッセマネの庭で祈っておられる時に、ユダの手引きで逮捕されました。剣をふるって戦おうとする弟子をとどめて、柔和と平静を通して、予言通りに、最高法院の死刑判決を受け取りました。ユダは事の成り行きに後悔し、祭司長たちに銀貨30枚を返しに行きました。「私は**罪のない人の血を売渡し**、罪を犯しました」しかし追い返された彼は、銀貨を神殿に投げ込み、首をつって**自殺**してしまいました。

一方**ペトロ**は、弟子の筆頭として**どこまでも従います**と誓いながら、大祭司の庭にしのみ込み、裁判の成り行きを見守りながら、人々から「弟子だろう」と言われると、「知らない」「違う」と**三度も嘘をついて**我が身を守ってしまいました。彼は自分の臆病さ、弱さに**泣いて**、十字架刑の現場に行くことも出来ず、身をひそめてしまいます。しかし墓から復活された主に出会い、「私の羊を飼いなさい」とのお言葉を三度も繰り返して頂くことによって、**弟子たちの中心**として彼自身が復活しました。ペトロの心には、自分よりも頭の切れるユダが、自分の判断の誤りに**絶望**して自殺してしまった悲劇の**痛み**が、深く刻みつけられていたのではないのでしょうか。ユダも自分も同じ罪を犯した。ユダは自殺することで自分の罪の償いをしようとした。自分は泣いて後悔したら、主の赦しを聞き取ることが出来た。ペトロは自分が主を裏切ってわが身を守ろうとした**罪人の頭**であることを、生涯何処へ行っても先ず証し続けたのではないのでしょうか。

パウロは、ずば抜けた秀才でした。ユダヤ教のホープでした。そこでキリスト教徒の**熱心な迫害者**として活躍していました。彼によってどれほどのクリスチャンが投獄され、また殺されたことでしょうか。しかし彼も**復活の主**に出会うことで**回心**しました。そしてその優れた能力をもって世界伝道の旗頭として活躍することになります。キリスト教の信者たちが、よくもまあ、迫害者パウロを仲間として受け入れたものです。常識では考えられません。しかし私はそこに**ペトロの存在**を見出します。ペトロが弟子の筆頭だったからこそ、パウロが受け入れられて、働けたのです。

主の逮捕の手引きをするという罪を犯して自殺したユダが、福音を全世界に広める立役者になったパウロを生み出すペトロに、大きな影響を与えたのです。歴史をこのように見てきますと、自らの罪に負けて大きな罪を犯したユダをも、**世界の救いの業にお使いになった**神さまの御業の不思議さに、驚かずにはられません。

[3] 主によってもたらされた和解

7節「主に喜ばれる道を歩む人を、主は敵と和解させてくださる」設立60周年を迎えた**聖書キリスト教会**を創設し牧会して来られた**尾山令仁牧師**は、アジアの人々への謝罪運動のために日本海外宣教会を作り、まず自分で1958年12月から6ヶ月間、フィリピンの島々を巡り、謝罪のメッセージを伝えました。1962年には台湾を皮切りにインドネシア、シンガポールを回りました。そして1963年念願がかなって韓国謝罪訪問が実現します。

2年後に大学生を連れて二度目の訪問の折りに、1919年に起こった3・1独立運動の最中に、日本の軍隊が村の信者を教会堂に閉じ込めて焼き殺した**堤岩里**を訪れました。そして36年間にわたる日本の植民地支配の残虐さの**象徴的事件**と受け取り、教会堂を日本人の手で再建し、せめてもの**謝罪と償い**のしるしにしようとの思いを与えられました。堤岩教会の牧師に幾度も手紙を書いてその願いを訴えました。頑強に突っぱねていた牧師も、遂に理解して受け入れてくれました。そこで1967年12月から委員会をつくり日本国内で謝罪の募金を開始し1年間で1000万円が献げられました。

1969年4月会堂建設の起工式に出席しようとした時、堤岩里の4キロ手前で尾山牧師ら2人が車から下車させられ、薄暗い喫茶店に連れ込まれました。日本人による教会建設反対中止を叫ぶ**遺族会たち100人**に取り囲まれ、怒りを浴びせられて数時間を過ごしました。そこで建設を認めた教会と遺族会との交渉が繰り返され、1年後に500万円で教会堂を、500万円で遺族会が記念館を建てることで折り合いがつかしました。1年半後1970年9月末にやっと**献堂式**が行われ、尾山牧師は再び訪れました。

一年半前に最も激しく反対した**遺族会副会長**が、真っ先に「牧師様、去年のことはどうか忘れてください」といって握手を求めてくれました。彼が車で案内してくれました。教会堂と記念館を見てから、遺族の家を一軒一軒訪ねると、**5年前**に初めて村に来た時、狂わんばかりに**怒りをぶちまけた**老婦人も素直に手を差し伸べて、堅く握りしめ「牧師様、有難うございます」と日本語で言ってくれました。このような変わりように接して、尾山先生も涙が溢れてきました。神さま以外に一体誰がこのような**和解**をもたらして下さるでしょう。先生の胸に箴言16；7「主に喜ばれる道を歩む人を、**主は敵と和解させてくださる**」との御言葉が浮んできたそうです。

[結] 一歩 また一歩と

最後に9節に注目しましょう。「人間の心は自分の道を計画する。主が一歩一歩を備えてくださる」 口語訳は「人は心に自分の道を考え計る。しかしその歩みを導く者は主である」 新改訳は「人は心に自分の道を思い巡らす。しかしその人の歩みを確かなものにするのは主である」

私たちは**自分をよく識っている**でしょうか。自分の能力・才能をはっきりつかんで、それを十分に使い切ろうとしますが、神さまが折角与えて下さった能力を、土に埋めて使わなかった愚かな人の話が聖書にあります。一方では何かをきっかけに、見違えるほどの人生を送り始めた人もいます。私たちは自分がわかっている積りで、案外よく分かっていないのではないのでしょうか。第一、自分が何時、何処でどのように死ぬのか、分からないのです。明日どうなるかも確かではありません。

そういう自分があれこれ計画を立てても、それが**最上の計画**であるはずがありません。私という人間を創造し、この世に生まれさせ、養い育てる手を備えて成長させ、導いて下さっている神さまこそ、**私を一番よく識っておられる方**です。その方に全幅の信頼をよせて、その心に聞き従っていく方が、はるかに自分の**人生を大事にする**ことではないのでしょうか。

「主が一歩一歩を備えてくださる」口語訳や新改訳では「**歩み**」と訳しています。歩むという言葉は、普通すたすたと歩いていく姿を思い浮べますが、原語は**ステップ（一歩）**を意味しているようです。そこで新共同訳は**一歩一歩**と訳したのでしょうか。また新共同訳「備える」とか口語訳「導く」の原語は「準備する」「確立する」「固くする」という意味ですから、新改訳「**確かなものにする**」の方が良いと思います。人生の歩みを考えますと、すた

すたとスムーズに足を運んでいるというよりも、一歩、そしてまた次の一歩と、ゆっくり進んでいるのではないのでしょうか。その一歩を神さまの導きのもとに「**ふらつかない確かな一歩 一歩**」としていきたいものです。

私はこの「一歩一歩」という言葉が好きです。教団讃美歌 288 番はこう歌っています。「**ゆくすえ遠く見るを願わじ 主よ 我が弱き足を守りて ひとあし ひとあし 道をば示したまえ**」 そうです。何時・何処でどのように死ぬかまで、知る必要はないのです。知らされてしまったら、かえってそれに縛られて、心が縮じまり、身動き出来なくなってしまうでしょう。だから正しい道を、一歩また一歩と示されればよいのです。神さまがよしとされる道、そして私にとって一番良い道が備えられているのですから。 **人生の真の知恵**は、まさに神さまを畏れ、信じ、聞き従うことによって、得られるのですね。 完